ネパールの風

’９８ネパール日記

ヤラ・ピーク登頂記　その・１０

後藤　隆徳

レッサム・ピリリィー、レッサム・ピリリィー・・・。花が風にそよいでいる、飛んで行こうか、行くまいか、あの丘の峠越え・・・。

夜も更けたキャンジュン・ゴンバのロッジ「キャンジュン・ゴンバ」は今日下山した私達A・B隊、シェルパ、そしてマンダーラ（革の手を股から下げ両手で打つ小さな太鼓）ハーモニカ、手拍子の熱気で溢れていた。

登山が成功に終わった今日、明日下山する今夜、登山隊の打ち上げパーティーが今始まろうとしていた。

パーティーはまず主催者を代表してシコタの挨拶から始まった。日焼けしたシコタの挨拶が続く。彼は登山が無事成功に終わった事を皆に感謝し、感極まり涙した。

私は厳しい言い方をすれば彼の「涙」の意味が良く理解できなかった。特にべらぼうに困難な登山でなかった。どちらかと言えば、ごくありふれた普通の登山だったと思う。彼にしても昨日、今日ガイドを始めた訳でもあるまい。

総てのことは良く分かっていたハズだ。「涙」を見せるほど「心を動かされるもの」があったのだろうか。私は、彼には部分部分でもう少しプロとしての「自覚・責任」「見識・力量」を発揮して欲しかった。それが偽わらざる気持ちだった。金を貰い客を案内するプロのカイド。それは、まず「安全」を最優先するものである。例え己の身を粉にしてもである。いずれにしろ、悲しみ（遭難）の涙でなく良かった・・・。

■

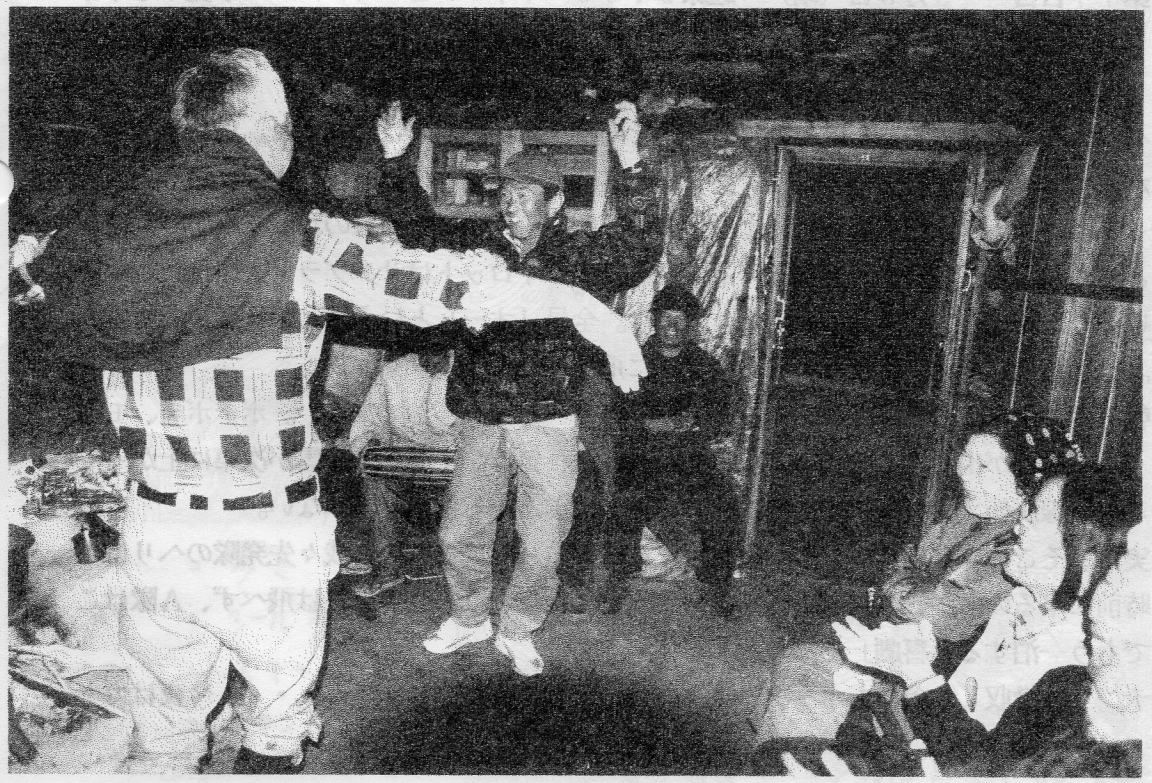
キッチン・ボーイが精根込めて作ってくれたケーキ・カットが始った。こんなヒマラヤの山中でケーキが出てくるなんて凄いことだ。カットは今日ヘリコプターで先発下山を決めた加藤が指名された。

しかし、加藤はそれを辞退して「今回いろいろ世話になった」と、私にその権利を譲った。私は躊躇しながらもそれを快く受け、全員が注目する中ケーキをカットした。拍手がランタン谷に響きにぎやかなパーティーが始まった。

いつしか村に住む若い女の娘も集まった。年齢は老けて見えるが１７～８だろう。こういう時は顔を出し若いシェルパと交流したり、御相伴に預かったりするのだろう。かつて

(上) 登頂祝い・お別れパーティーのケーキカット

(下) シェルパダンスに興じるゴトーとシコタ



日本にもあった風景である。ケーキ、チョコレートなど喜んで食べてくれた。

ここのロッジの主人は２０歳、奥さんは１８歳。若干２０歳でこんな立派なロッジを所有しているのが不思議で聞いてみたら、この下のランタン村にお父さんがいて、お父さんもロッジを経営しているとの事。村では結構な財産持ちというところか。奥さんはもうじき初めての出産で、編み物に勤しんでいた。

シェルパの歌と演奏に合わせ「シェルパ・ダンス」が始まった。踊りは我がＢ隊担当のシェルパのニマが圧倒的だった。妖しく揺れるローソクの炎に顔を紅潮させ、両腕を広げ軽快な演奏に合わせクネクネと踊り、盛り上がる。

狭いロッジの中は熱気でムンムンしてくる。シェルパの歌と演奏は最高潮に達した。我々もたまらず踊りの輪の中に入っていく。「シェルパ・ダンス」は案外難しかった。傑作で一番人気だったのは今泉で、「阿波踊りみたいな、佐渡おけさのような」フニャフニャネチネチしたダンスは爆笑を誘った。

米やイモ、アワから作る「ロキシー」と呼ばれる蒸留酒を飲んでみた。疲れていたこともあり強くてあまりおいしくなかった。踊りは続いていたが我々は２１時で引き上げた。外はそれは見事な満天の星。ちょっと日本を思い出しセンチになった。シュラフに潜るとマンダーラの例のバスがいつまでも響いていた。

サヨナラ、私のヒマラヤ、又会う日まで

第１１日目　　5月3日（晴）　起床６：００－キャンジュンゴンバ・ヘリ発１０：１０－カトマンドゥ１０：４０－カトマンドゥ泊

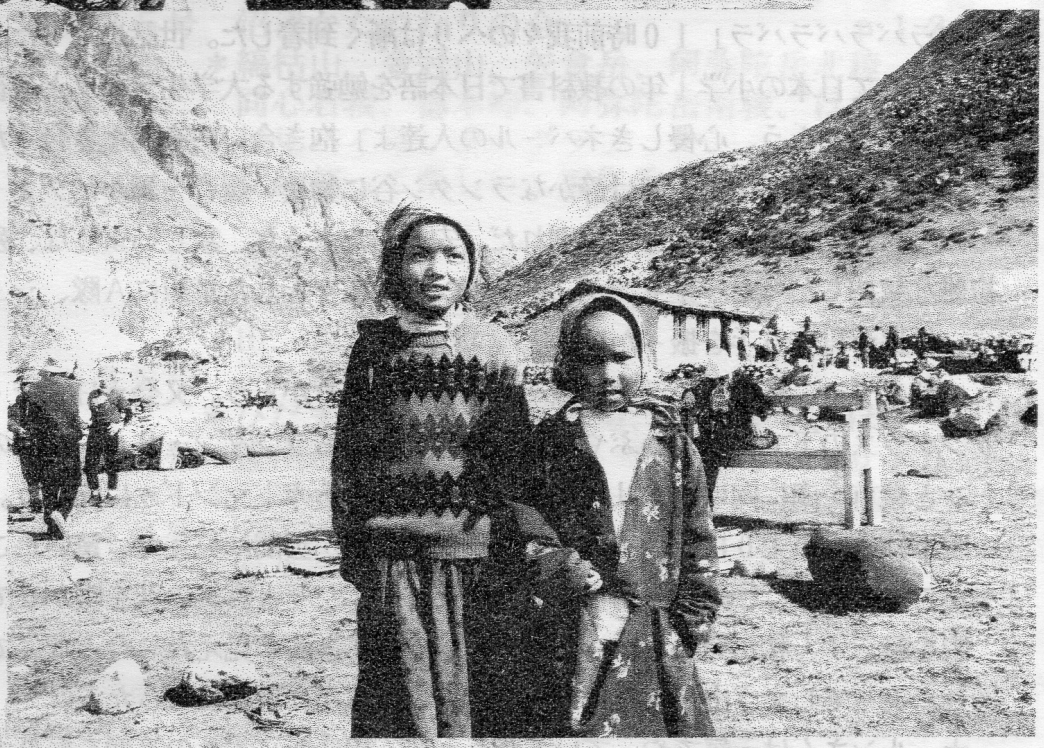
「パラ、パラ、パラ、パラ」最初にヘリのその音を耳にしたのは私だった。思わず「ヘリが来た！」と叫んだ。ヘリはランタン谷の雲間に重そうな機体を持ち上げ、這うように登ってきた。実際、空気の薄い富士山以上の高度を飛ぶのは大変なのだ。

ところが降り立ったヘリは別隊のものだった。パイロットはサングラスを掛けた若く美しい白人の女性。「掃き溜めにツル」の感じ。全員「オー」という感じの好奇な眼で魅入る。しかし人、荷物を積むとアッという間に飛び去った。

朝一番で飛来するといっていた我々のヘリは杳（よう）として来ない。ボチボチ、モンスーンの影響が出てくる頃である。時間が経過し、気温が上昇すると雲が次第に上がってくる。無線が使えず有視界飛行のヘリコプターは雲が出ると絶対飛べない。

実は、そこに昨夕のジャンケンの重大な意味があった。この後、我々先発隊のヘリは１０時前に来るのだが、後発隊のヘリは悪天候を理由にとうとうこの日は飛べず、Ａ隊はここでもう一泊する「喜劇」となった。

テントを徹収し、食料もポーターなどに分けてしまったというのに・・・。今夜はカト



(上) ロッジ「キャンジュンゴンバ」の若奥さん編物に忙しい
(中) キャンジュン・ゴンバの子供
(下) 同所の若い娘(左端の2人)

マンドゥのホテルで１０日振りのシャワーを浴び、登山を振り返りうまい寿司で上等なワインでもと思っていただろうに・・・。全てパーになってしまった。

更に「喜劇」はそれだけではなかった。翌日もヘリは飛べなかったのだ。しかも、その日飛ばなければ週１便の香港への飛行機に間に合わなくなってしまう。勿論、間に会わなければ帰国はおぼつかない。下手をすれば会社の席も無くなってしまう。慌てたアルパイン・ツアーは「マル秘・奥の奥の奥の手」を使った。

残されたA隊に「緊急事態発生！重大急病人が出た！」事にして、強引にヘリを飛ばさせた。そんな事もあり、後になり改めて加藤のジャンケンの意味の大きさに一同、ナマステ・ナマステであった。

■

「バラバラバラバラ」１０時前我々のヘリは漸く到着した。世話になったサーダー、ニマ、そして日本の小学１年の教科書で日本語を勉強する大学生テックと最後の言葉をかわす。「ありがとう、心優しきネパールの人達よ」抱き合い肩をたたき合った。

ロシア製の軍用中古ヘリは静かなランタン谷に物凄い爆音を轟かせグォーンと飛び上がった。これでいよいよ山ともお別れだ。安心したような、寂しいような、残念なような、複雑な気持ちだった。キャンジュン・ゴンバの広々とした草原にA隊、シェルパ、ポーター、住民が見守り手を振ったいる。

「サヨナラ、私のヒマラヤ。数々の思い出をありがとう。又会う日まで・・・。」私はサングラスの下でソッとつぶやいた。見覚えのあるランタン・リルンが目の前に迫るとグーンと機首を南に向けたヘリは小刻みに揺れながらカトマンドゥに向かう。

眼下にはつい１０日程前歩いてきたランタン谷が雲間に見えた。驚いたことにシャクナゲがことの外多く、両岸の切り立った山々にビッシリと真紅の花を咲かせていた。

眼を凝らすと私が発熱し唸ったゴラタベラらしき所が見えた。今となっては懐かしくもあり、笑ってしまう出来事だった。でも皆には本当に世話になった。

ナールンさんは元気でやっているだろうか。相変わらずあの笑顔を振りまいているだろうか。今度行く時は真先にお礼をしなくちゃ。それまで生きているだろうか・・・。

ロシア製軍用中古ヘリはとにかくガタビシで怖かった。「パラパラパラ」と軽快な音で飛ばない。しかも座席は映画で見るような正に軍用、お見合い方式でズラーと横になって座る。隙間が多く風がスースーして足元が寒い。いつ落ちるかもしれないと想像すると実にイヤだった。ところが女性軍は呑気なものでワーワー、キャーキャー。

３０分で右手に街らしきものが見えた。見覚えのある懐かしいカトマンドゥだ。ヘリを降りると既に夏の装いでムッとする暑さが辺りには漂っていた。ああ、美味いビールが飲みたい。喉がそう言っていた。

（以下次号最終回につづく。ナマステ・ナマステ）

(上) 下山日の朝のキャンジン・ゴンバ

(中) B隊の皆さんとスタッフ

(下) ちょっとアブナいロシア製ヘリ